

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第795号 平成26年8月29日

力のある学校（2）

子ども達の学力不足問題について議論していると、学校側から「学校としては学力向上に取り組みたいのだが、保護者の子ども達の学力に対する関心が薄く、協力が得られないため、十分成果を上げる事が出来ない」といった話がしばしば出て来ます。

農・漁村地帯では、家の後を継がせるので勉強は出来なくても気にしないという家庭がある事を耳にします。生活保護世帯が多い地域では、子どもの学力に関心がなく、放任状態の家庭も少なくありません。こうした地域にある学校では、子ども達の学力向上のために家庭と連携する事が難しいというのは、容易に想像出来ます。

しかし、その一方では、同じ地域にありながら、学力向上に大きな成果を上げている学校とそうでない学校が存在するという現実を、見落としてはならないと思います。

今から30年以上も前の1979年に、アメリカの教育学者エドモンズ氏が、一つの研究成果として「効果のある学校（effective schools）」の存在を明らかにしています。

このエドモンズ氏の研究に関しては、大阪大学の志水宏吉教授らが多くの著書を出しておりますが、今日は同氏の著書「力のある学校の探求」「公立小学校の挑戦」等を基に紹介したいと思います。

エドモンズ氏がエスニック・マイノリティや低階層の子ども達の学力を調査した時に調査対象となったアメリカ北西部の約800校の中で、白人ミドルクラスの子どものそれと比べて遜色のない成果を上げている学校が55校あったといえます。

エドモンズ氏が特に関心を寄せていたのは黒人家庭の子ども達ですが、当時の黒人達の暮らしは非常に貧しかったようです。今日の日本の貧困問題と同等、当時の黒人達の多くも、貧困の故に学ぶ機会が失われ、貧困の連鎖から抜けられずにいました。

エドモンズ氏は、貧困の世代的再生産を断ち切るためには子ども達の学力を高める必要があると考えており、環境に不利な立場にある子ども達の基礎学力を下支えする事に成功している学校を「効果のある学校」と評価しています。

そして、エドモンズ氏は、「効果のある学校」には次の5つの特徴があると指摘しています。

- 校長のリーダーシップ
- 教員集団の意思一致
- 安全で静かな学習環境
- 公平で積極的な教員の姿勢
- 学力測定とその活用

また、エドモンズ氏の研究を皮切りに、アメリカやイギリスでは、一時期「効果のある学校」の研究が盛んになされ、その成果として、

「効果のある学校」に備わっている特徴を次の11項目にまとめています。

- 校長のリーダーシップ
- ビジョンと目標の共有
- 学習を促進する環境
- 学習と教授への専心
- 目的意識に富んだ教え方
- 子ども達への高い期待
- 動機付けにつながる積極的評価
- 学習の進歩のモニタリング
- 生徒の権利と責任の尊重
- 家庭との良好な関係作り
- 学び続ける組織

前段の5項目、そして後段の11項目を見ていて、私には不思議に思います。何故なら、余りにも当たり前の事が書かれているように感じるからです。

校長のリーダーシップ、目標の共有、組織全体での取り組み、どれ一つとっても当然の事ですが、逆にいうなら、今も昔も、この当然と思われる事の実践が如何に困難かを示しているともいえるでしょう。

志水教授は、上記の項目を総括して、「端的にいうなら、欧米の『効果のある学校』は『効果のある授業』を行う学校だという事である（同氏著「つながり格差が学力格差を生む」から）と述べていますが、「効果のある学校 = 効果のある授業を行う学校」という視点は、授業で成果を上げられなければ、学校が如何に頑張っているといっても説得力はないという意味で重要だと思います。（塾頭：吉田 洋一）